

特集

立命館大学生命科学部・薬学部「プロジェクト発信型英語プログラム—Project-based English Program」の理論的基盤と実践

鈴木 佑 治

要 旨

2008年4月に発足した立命館大学生命科学部・薬学部は、生命科学と薬学の先端的な国際プロジェクトに参加できる人材を育成することを目標に掲げ、その一環として「プロジェクト発信型英語プログラム—Project-based English Program」を導入した。本稿では、効果的な言語教育は的確なコミュニケーション論に依拠するという前提のもと、まず、コミュニケーションとは何かという質問をめぐり、以下の諸点を中心に解説する——1. コミュニケーションのメカニズム、2. メッセージと伝達メディアの多感覚性と多様性、3. 言語メディアの3層構造（言語能力、言語運用スキル、プロフェッショナル・スキル）、4. コミュニケーション活動としてのプロジェクト、5. 状況とスタイル・表現・グローバル英語の空間。次に、こうした理論的基盤をもつ本プログラムについて、以下の諸点を中心に解説する——1. プログラムの目標と構成、2. 「プロジェクト」と「スキル・ワークショップ」、3. 先端的デジタル・メディアの活用、4. 学習成果と評価、5. 共同運営体制。

キーワード

コミュニケーション、発信、受信、メッセージ、伝達メディア、グローバル・イングリッシュ、プロジェクト、スキル・ワークショップ、共同運営体制

1. 「プロジェクト発信型英語プログラム」の理論的基盤 — コミュニケーションとしての英語学習

1.1. 日本の英語教育におけるコミュニケーション理論の欠如

中学校以上の正課に英語を取り入れたのは1872年である。その主たる目的は、西洋社会に追いつくために英語を介して西洋の学問と知識を学び西洋事情に通じることであった。以来、英語の書物を日本語に訳して読むという受信型英語学習方法、いわゆる訳読（grammar-translation method）が根付き、その痕跡は現在でも残っている。西洋では古代ギリシャ語やラテン語のような古語を学ぶ際に、そして日本では漢文を学ぶ際に重用された学習方法であるが、死語化された古語とは違う生きた言語の学習方法としては過去の遺物であろう。そうした伝統を打ち破るべく、戦前にはH. E. パーマーらのオーラル・メソッドが、戦後には構造主義言語学の影響下で

オーラル・アプローチやダイレクト・メソッドが、最近ではトータル・イマージョンなど、枚挙に暇が無いほど多くの学習方法が試みられてきたが、コミュニケーションに「役に立つ」学習方法として定着したかどうかは疑問である。

いずれの方法論にも言語学習の基盤であるべき確固たるコミュニケーション論が無い。コミュニケーションの根に言語の幹が伸び言語学習の枝が生え学習効果の実を結ぶ。根が無くして植物は育たない。的確なコミュニケーション論無くして的確な言語理論・言語学習理論は望めない。言語教育が依拠する言語の基礎研究が、コミュニケーションを軽視したことも要因の一つとして上げてよい。それに対してヤコブソン（1976）は「コミュニケーションにおける言語」¹⁾ 研究の重要性を説いたが、それから数十年経った今でも十分な軌道修正には至っていない。オーラル・コミュニケーションという高等学校の英語科目にコミュニケーションを重視する姿勢がみられるものの、かつてのオーラル・メソッドやオーラル・アプローチの二番煎じの感は否めない。かくして、コミュニケーションに「役に立つ」英語学習への暗中模索の挑戦は 21 世紀に続いている。生命科学部・薬学部の「プロジェクト発信型英語プログラム」はそうした挑戦の一つである。

1.2. コミュニケーションとは

本英語プログラムが依拠するコミュニケーション論について、紙面が限られているため詳細を省きスケッチしてみたい²⁾。コミュニケーションは発信過程 (production) と受信過程 (perception) の 2 つに大別できる。図 1 が示すように、発信者 (addresser) は自分を囲む社会的状況 (societal situation) および個人的状況 (individual situation) から情報を受容し、メッセージ (message) を生成して伝達メディア (media) を介して発信する。受信者 (addressee) は社会的状況と個人的状況に照らしながらそのメッセージを認知・理解する。コミュニケーションの当事者は発信者と受信者の 2 つの役割を代わる代わる演じる。発信者がメッセージを生成し発信すると、受信者はそのメッセージを認知・解釈し、新たなメッセージを生成しそれに反応する。元の発信者はその反応を受けて、今度は受信者としてそれを解釈し再び発信者としてメッセージを生成し返す。各当事者は発信者と受信者の 2 役を代わる代わる演じコミュニケーション・サイクルを繰り返す。

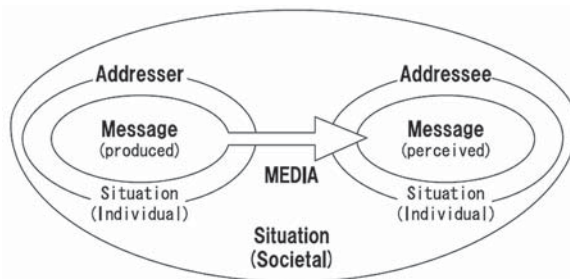


図 1 コミュニケーションの構造

当事者間のコミュニケーションに並行して、各当事者の体内では脊髄・脳の中樞神経と体の細部に張り巡らされた末梢神経との間で、体外情報を受容・弁別・理解するまでの受信活動とそれを受けて思考し反応するまでの発信活動の 2 つの過程で成る体内コミュニケーションが行われている。神経学では情報の受容・弁別・理解を求心性過程 (afferent) と称し、反応を遠心性過程 (efferent)

と称する³⁾。本稿では図2のように個体内コミュニケーション活動を primary communication と呼び、
 個体間のコミュニケーション活動を secondary communication と呼ぶことにする。プロジェクトを
 語る上で、secondary communication の集団コミュニケーション的側面も重要な要素であるが、
 余白が限られておりここでは触れない⁴⁾。要は、これら2つのレベルのコミュニケーション活動
 があってはじめてコミュニケーション能力が身に付くと言えよう。言い換えれば、コミュニケー
 ション重視の学習方法では、学習者内部で primary communication 活動が行われ、学習者間で
 secondary communication 活動が行われていなければならない。

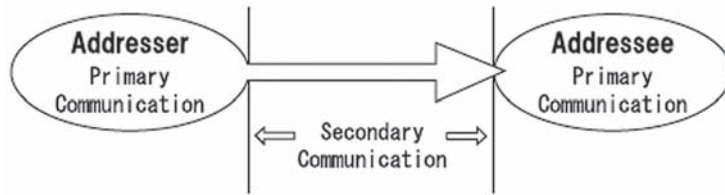


図2 Primary Communication と Secondary Communication

1.3. コミュニケーションにおけるメッセージと伝達メディアの多感覚性と多様性

メッセージと伝達メディアは多感覚であり多様である。ベンソン（1994）の思考の神経学の
 知見も参照すると、メッセージは内的状況と外的状況、言い換えれば、環境から次のような過程
 を経て作られるものと思われる。体の諸器官の抹消神経が環境から情報を受容する。その情報は
 脊髄神経と脳神経から成る中枢神経に送られて弁別され、図3が示すように言語（linguistic）、
 視覚（visual）、聴覚（auditory）、触覚（tactile）、味覚（gustatory）、嗅覚（olfactory）、その他の
 単一様態感覚連合野で単一様態感覚情報（unimodal percepts）に加工される。その後更に異種（ま
 たは交差）様態感覚連合野に送られて多感覚情報（heteromodal percepts）⁵⁾ になり、多様で複合
 的メッセージが生まれる⁶⁾。情報を伝達する媒体も、言語（linguistic）、視覚（visual）、聴覚
 （auditory）、触覚（tactile）、味覚（gustatory）、嗅覚（olfactory）、その他の諸器官とそれらに付

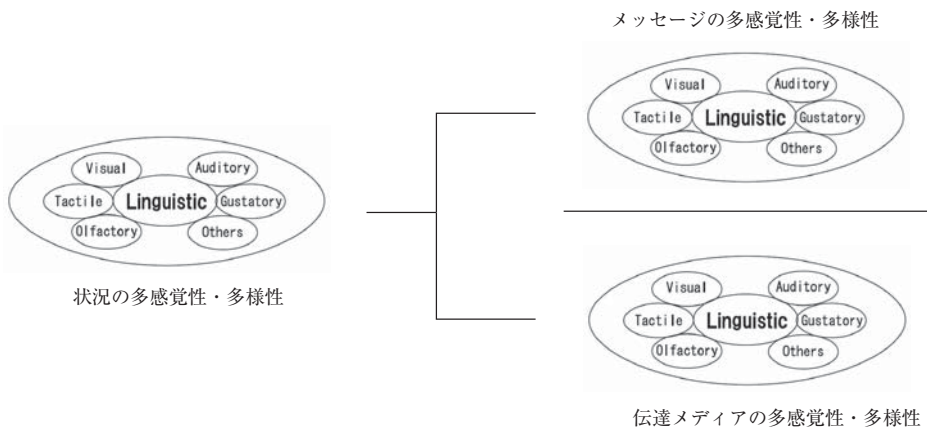


図3 The Multiplicity or Diversity of Messages and Media in Primary Communication
 (体内コミュニケーションにおけるメッセージとメディアの多様性)

随する神経システムから成り、体内の伝達メディアは多感覚であることは言うまでもない。

脳内で生成された多様で多感覚なメッセージを相手にどのように伝えるか、ここから secondary communication の伝達メディアが始まる。ヒトはコミュニケーションの伝達手段として言語に依存するが、言語で全てを伝えることはできない。言語と他の伝達メディアを掛け合わせることに より効果的にメッセージを伝達できる。secondary communication における伝達メディアは自然言語以外に印刷などのテクノロジー (technology/artifacts) の発展に依存するが、昨今の先端デジタル技術は視覚、聴覚、言語を組み合わせたハイブリッドで融合型の伝達方法を提供している。こうした新リタラシー (literacy) は若年層に浸透しつつあるが、紙に書くこと (paper & pencil) に慣れ親しんできた年配層にはあまり浸透していない。このような世代間の伝達メディアの違いは、マクルーハン (1964) の「メディアはメッセージである」ということばが事実であるなら、伝達メディアの範疇を超えてメッセージそのものに質的变化をもたらすことになる。同じ現象を描くにせよ、俳句のように言語型の描写方法を使うか、絵画という非言語型の描写方法を使うか、IT のようなマルチ・メディア的描写方法を使うかで、メッセージに質的な相違をもたらすであろうことは容易に想像できる。いずれにせよ、多感覚融合型表現メディアを駆使してコミュニケーションし続けることは、若い学習者にとって避けることのできない現実であろう。従って、コミュニケーションを重視した 21 世紀に役立つ学習方法は、多様なメッセージを多様な伝達メディアで発信し受信することに寛容でなければならない。コミュニケーションを言語活動にのみ限定してしまうと、言語化が可能どうかを軸にメッセージを取捨選択することになり兼ねず、創造的なコミュニケーション活動を阻害する結果となる⁷⁾。様々な伝達メディアをどのように駆使して伝えるか、そこに個々の学習者の独創性がみられるものと思う。独創性がメッセージの質感を高めるとしたら、メディアはこの意味でもメッセージである⁸⁾。

1.4. 言語メディアの 3 層構造—言語能力、言語運用スキル、プロフェッショナル・スキル

言語がヒトの伝達コミュニケーションのメディアとして重要であることは疑いの余地は無いが、唯一無二のメディアではない。言語メディアに焦点を当ててみよう。ヒトの中枢神経に存在する言語能力 (linguistic competence) は、図 4 のような構造を持つ。統語 (syntax) いわゆる文法の体系、形態 (morphology) いわゆる語形成の体系、音韻 (phonology) いわゆる発音の体系、意味 (semantics) の体系から成る。ヒトは 3、4 才くらいまでに一応の母語能力を習得し、脳の臨界期の 12 才くらいまでにかなり成熟した母語能力を習得する⁹⁾。自然習得とは、日常生活で母語を図 2 のようなコミュニケーション活動に使用 (linguistic performance) することにより、自ずと能力が備わることを指す。運用能力を図 5 で示すように受信と発信に分けて、更に音声によるものと文字によるものに仕分けると、音声による受信は聞く (listening)、音声による発信は話す (speaking)、文字による受信は読む (reading)、文字による発信は書く (writing) の 4 つの言語運用スキル (skills) に分類される。

言語習得上これら 4 つのスキルは連動して発達する。ヒトは生まれると同時に母親が話しかける声を聞き、諸説はあるが、2 才前後で 1 語文、2 語文を話し始めて 3、4 才になる頃にはまとまった文を話すようになる。そして徐々に文字を読めるようになり小学校に入り書くことを覚える。このように聞き、話し、読み、書きの 4 技能を駆使してコミュニケーションしながら、図 4 の言

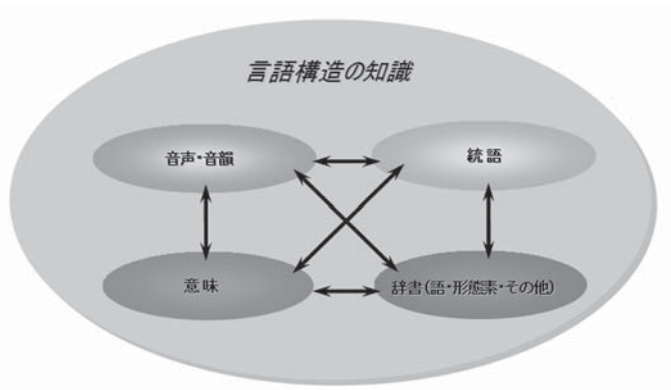


図4 言語能力の構造 (linguistic competence)

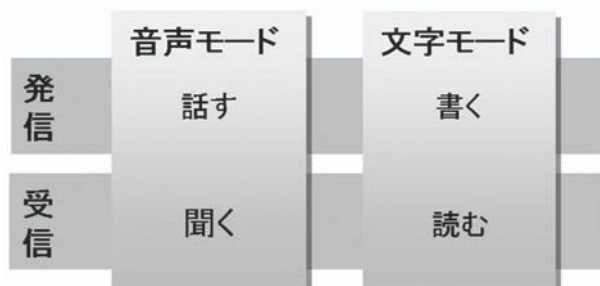


図5 言語運用スキル (linguistic skills)

語能力を自然に習得する。

こうしてコミュニケーションで培われ習得される言語能力は、コミュニケーション運用に機能するという意味で機能的 (functional) 言語能力と称される。これに対して、言語構造を分析するのに必要な分析的 (reflexive) 言語能力または言語知識がある。後者は言語学などの言語の基礎研究に必要な知識であり、文法用語や音声記号などから成るメタ言語 (meta language)、いわゆる専門用語を作り言語の仕組みを分析する。分析的知識は言語の基礎研究には必要であるものの、機能的言語能力の習得を目指す言語学習には必要ない。訳読型学習方法が言語学習法として失敗したのは分析的言語能力に依拠したからである。読解と称しながら、実際には対象言語の文構造の分析に多くの時間を費やし情報収集の手段として機能しない。活字情報は後戻りして分析できるが、音声情報にいたっては瞬時に流れ去るために分析する余地など無い。これではいつまで経っても上達せず、その結果英語に対する苦手意識をもつようになる。自動車の構造を分析できなくても自動車を運転できるように、母語の構造を分析できなくても母語でコミュニケーションをすることができる。勿論、ある程度の分析的知識は必要ではあるが、コミュニケーションを通して機能的言語能力を身につけることが先決である。

言語能力は言語をコミュニケーションに運用することによって習得される。3、4才頃までに習得される基本的な言語能力は、子供の成長過程でコミュニケーション活動の質が変化するのに

伴い成熟していく。コミュニケーションを重ねるうちにより深い内容を求めるようになると、図 6 で示すリサーチ (research)、プレゼンテーション (presentation)、ディスカッション (discussion) をする機会も自ずと増えて情報交換が更に活発になる。それに並行してプレゼンテーションやディスカッションにディベート (debate) やシンポジウム (symposium) などの活動が加わる。本プログラムではこのような表現活動をプロフェッショナル・スキル (professional skills) と呼ぶことにしたが、狭義ではなく広義のプロフェッショナル・スキルと捉えるべきもので、リサーチ・スキルと呼ぶ方が的確かもしれない。種類を問わず職業はみな専門知識を要し何らかのプロフェッショナル・スキルを駆使する。言語能力や言語運用スキルは、プロフェッショナル・スキルに運用することによりコミュニケーションに機能するスキルになる。プロフェッショナル・スキルはプロジェクトを行う上で必然不可欠であり、プロジェクトを行うことにより機能的に習得できるスキルである。

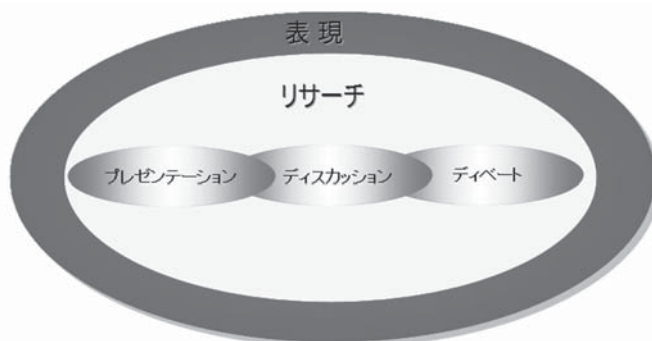


図 6 プロフェッショナル・スキル (professional skills)

1.5. コミュニケーション活動としてのプロジェクト

「プロジェクト発信型英語教育」という名称は、その基盤がコミュニケーションであり、コミュニケーションの基盤がプロジェクトであること、もう一歩進めて、コミュニケーションはプロジェクトであり、プロジェクトはコミュニケーションであることを含蓄する。英語の project の語源を見ると、この語がコミュニケーションの表象活動を指示することが分かる¹⁰⁾。「計画する」とか「企画する」という意味で動詞としても使われているが、ラテン語の「前に伸びる」とか「突出する」を意味する動詞 *prōjicere* (*prō-* “forward” + *jacere* “to throw” = to throw forward/out) を借入した¹¹⁾。やがて「投射する」という意味が派生し、現在では映画をスクリーンに投射する (We projected a motion picture on the white wall of a building = 映画を白壁に投射した) などの意味でよく使われる。また、内面にある考えや感情を「投射する」(He projected his irritation onto his wife = 彼はイライラを妻に露にした)、即ち、考えや感情を「表象する (represent)」とか「想像する (imagine)」という心理的な意味でも使われる。これはメッセージを「表象する」というコミュニケーションの中心的活動と一致する¹²⁾。project に関連して、project の反意語に同じくラテン語から借入された *injeciere* (“to throw in” 中に投げ入れる、注入する) に語源をもつ inject がある¹³⁾。注射器で薬を体内に注入するとか、考えを内面に取り入れるという意味で使われる。

project がコミュニケーションの発信活動に相当し、inject が受信活動に相当するものと解釈すると、project と inject は対を成してコミュニケーションの発信・受信のサイクルを指す。

コミュニケーション活動は当事者各自の関心を基軸に展開される。関心事は大小公私さまざまで、それに呼応してプロジェクトも国家プロジェクト、会社のプロジェクト、小学生の夏休みプロジェクトなど大小公私さまざまである。大小公私に関わらず当事者が企画・立案・執行する行為すべてはプロジェクトである。プロジェクトは、また、関心事を軸に展開され、この点でもプロジェクトとコミュニケーションは一致する¹⁴⁾。誕生と同時に始まるコミュニケーション活動は、大小公私のプロジェクトの連続とみなすことができる。幼稚園児にとっての遊び、小・中・高生にとっての部活、大学生にとっての卒論や就職など、社会人の商品開発など、コミュニケーション活動は、こうしたその場その場の関心事を中心に展開される一連のプロジェクトと読み替えることが出来る。

1.6. コミュニケーションにおける状況とスタイル、表現、グローバル英語の空間

コミュニケーションのスタイルは状況（環境）に呼応して多様であるが、Joos (1964) にならい、親密 (intimate)、カジュアル (casual)、インフォーマル (informal)、フォーマル (formal)、超フォーマル (frozen) の5つのスタイルに大別できる。これら5つのコミュニケーション・スタイルは伝達メディアに連動している。まず、言語というメディアについて考えてみよう。言語は、1. 言語のレベル、2. 方言のレベル、3. スタイルのレベルの3層から成る。いかなる言語であれ複数の方言を持ち、それぞれの方言は複数のスタイルを持つ。言語のスタイルはコミュニケーション・スタイルと連動し親密スタイルから超フォーマルまで5つのスタイルに分類できる。主要方言のうち標準語化とされたものを標準語と呼ぶが、同じ標準語でも公の会議で使われる超フォーマルな言葉遣いと友達同士の親密な言葉遣いとは質的に違う。社会言語学では言語、方言、スタイルのいずれをも言語変種と称し、それぞれが重要な役割をもつ。言語を使いこなすということは状況に合う変種を使えるということでもある。家族団らんの中では親密な変種を使い、学会では超フォーマルな変種を使う。従って、超フォーマルなスタイルやフォーマルなスタイルを使えるだけでその言語を熟知しているとは言えない。いかなる言語も複数の変種から成る複合体であることを銘記すべきである。

勿論、外国語学習において、まず、対象言語のフォーマル・スタイルの標準語を学習することから始めるのは至極当然である。だがここでどの変種をもって標準語とするかというもう一つの難問に直面する。多くの言語社会で一部エリートがさしたる科学的根拠も無く人為的に決める場合が多い¹⁵⁾。外国語学習のオーセンティシティー (authenticity) にからむ問題でもあるのでもう少し詳細を述べたい。日本の英語教育では、戦前は英国のオックスフォード大学やケンブリッジ大学などの大学や宮廷で話される Received Standard を目標にしたが¹⁶⁾、戦後は一変してアメリカの標準語に照準を合わせてきた。しかし、アメリカの標準語と言える変種は流動的で定まらず、1950年代の音韻学者 Trager & Smith などは迷った挙句に、半ば強引にアメリカ中西部の方言を標準語 (General American English) と決めつけて分析した¹⁷⁾。評価基準を標準語に置いた場合、その正当性については大いに議論の余地を残す。

母語の習得過程でヒトはまず肉親と親密なスタイルの言葉遣いを聞き話し、3、4才になると他を意識したカジュアルな言葉遣いを覚え、中学・高等学校辺りから先輩後輩などの上下を意識

したインフォーマルな言葉遣いを身につけ、大学生になり就職活動を通してフォーマルな言葉遣いに接し、社会人になりフォーマルそして超フォーマルな状況に身を置くようになると、それに符合する言葉遣いを習得する。こうしてみると英語を学習し始める中学生にとって、母語の日本語でさえフォーマル・スタイルのコミュニケーションに不慣れな時期に、英語でフォーマル・スタイルのコミュニケーションをすることは不可能に近い。しかし、中学校の英語教科書の会話文は標準語のフォーマル・スタイルで書かれたものが多く、同年代の英語話者にさえ不慣れなスタイルを強いることになる。

付随して更に考慮すべき問題が幾つかある。いかなる言語であれ、親密、カジュアル、インフォーマルな表現形態は、フォーマルな表現形態では非文法的とみなされる言説が多く、加えて、非言語の伝達メディアを多用するのが特徴である。主語、述語、目的語、前置詞（後置詞）などの関係詞を省略し単語の羅列のように聞こえる。しかし、よく注意すると主語はことばではなくビジュアル情報で表現されているとか、言語と非言語が補完し合いそれなりの統語ルールを満たしていることが分かる。ITテクノロジーの発達でグローバル化が加速しグローバル英語が席卷する空間では、こうした言語と非言語情報を巧みに組み合わせたカジュアルでインフォーマルな表現形態が飛び交う。グローバル英語が飛び交う空間はまた、英語だけに閉ざされない参加者優先型であり、参加者は伝えたい語彙・表現がグローバル英語に欠けていると判断するや、自分の母語から語彙・表現を臆することなく自由に投入する。この空間では英語の標準語すら一変種でしかなく、リング・フランカの英語変種が闊歩する。かつて排除すべき対象であった社会言語学という外国語学習における母語障害（interference）は、この空間では多様性と豊穡の象徴となる。英語の語彙として定着した日本発の造語 walkman（文法的には walking-man）とか kaizen など、日本語から投入された語彙・表現に限定してもおびただしい数になる。英語が他言語を侵略するというよりは、他言語が英語に進入する。それを許容する新変種の英語がグローバル英語である。

これからの英語学習は、まず、グローバル英語の空間に参入し発信することから始めるべきである。言語タイポロジー（language typology）の見地からみると、グローバル英語は、非英語圏の話者によるリング・フランカの機能を持つ変種と、英語圏の話者の諸変種が混在するハイブリッドな変種群である。それを細分すると、ラテン語的サブ変種群、東南アジア語的サブ変種群などのサブ変種群があり、いずれを選択するかは参加者に委ねられている¹⁸⁾。プロジェクト発信型英語プログラムでは、まず、グローバル・リング・フランカの世界に参入し、プロジェクトを組み成果を発信することから始める。しかし、グローバル・リング・フランカをあくまで中間プロセスの言語と捉えて、そこから徐々に英語のフォーマリティーを高めることにより専門分野プロジェクトに相応する英語を習得していく。

2. 立命館大学・生命科学部・薬学部 「プロジェクト発信型 英語プログラムー Project-based English」

以下、生命科学部・薬学部の「プロジェクト発信型英語プログラム」が、上記に説明したコミュニケーションの理論に基づき、どのように企画・立案・運営されているかを述べたい。

2.1. プログラムの目標と構成

生命科学部・薬学部の理念は、生命科学および薬学の分野においてグローバル社会で活躍する専門家を育成することである。英語で専門分野の先端的研究プロジェクトを行い、その成果を英語で発信する能力はそうした専門家にとって必要不可欠である。学生が在学4年間にこの能力を身につけることを目標にしなければならないことは言うまでもない。しかし、そこに到達するには日常生活の諸事につき英語でコミュニケーションすることが前提となるが、1.1. で述べたように、大方の学生はその能力を備えていないのが現状である。よってそこが出発点となる。1、2回生は、まず、キャンパス内外の生活における関心事をテーマにプロジェクトを組み、成果を発信することを手始めに基本的なコミュニケーション能力を身につける。3、4回生では専門分野のプロジェクトに挑戦し、その成果を発信し専門分野が要するコミュニケーション能力を身につける。本英語プログラムの大枠は図7のとおり、半期制を採用し、「プロジェクト」と「スキル・ワークショップ」の2本柱から成る。「プロジェクト」ではプロジェクトを通してコミュニケーションを実践し、「スキル・ワークショップ」ではプロジェクトをする上で必要な英語運用スキル（図5）と英語能力（図4）を学習する。

プログラムの効果は学習者のモチベーションを切り離しては考えられない。理系、文系に限らず英語に苦手意識を持つと表明する学生の数が多い。英語学習に対するモチベーションの欠如がその原因であるが、英語でコミュニケーションできない、それ以前にその場が無いという根本的な問題に帰着する。まず、英語で意味あるコミュニケーション活動をする場に参加できさえすれば、モチベーションも高まり苦手意識を克服できるものとする¹⁹⁾。前セクションで述べたことに言い換えてみると、そのためには学習者各自が関心事を基にメッセージを発信・受信して自由にコミュニケーション活動を行う場が必要になる。本プログラムの「プロジェクト」では学習者が関心事をテーマにプロジェクトをすることにより英語運用能力の欠如を痛感し、それを満たそうとする意欲を高めて「スキル・ワークショップ」に積極的に取り組む姿勢をもつようになる。この意味においても、本プログラムでは2.2と2.3で述べるように「プロジェクト」と「スキル・ワークショップ」が連動するよう細心の注意を払っている。

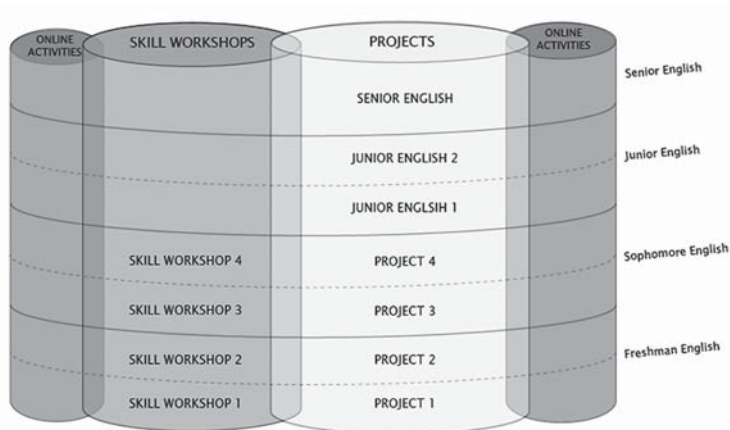


図7 立命館大学生命科学部・薬学部 「プロジェクト発信型英語プログラム Project-based English Program」

本英語プログラムの詳細と内訳は表 1 のとおりである。1 回生の Freshman English では、前期に Project 1 (P1) と Skill Workshop 1 (S1) の計 2 コマ・2 単位を履修し、後期に Project 2 (P2) と Skill Workshop 2 (S2) の計 2 コマ・2 単位を履修する。2 回生の Sophomore English では、前期に Project 3 (P3) と Skill Workshop 3 (S3) の計 2 コマ・2 単位を履修し、後期に Project 4 (P4) と Skill Workshop 4 (S4) の計 2 コマ・2 単位を履修する。Freshman English と Sophomore English は必修演習科目で総計 8 コマ・8 単位である。3 回生の Junior English は、「プロジェクト」と「スキル・ワークショップ」を 1 コマに合体させたもので、前期の Junior English 1 (JP1) は必修講義科目で 1 コマ・2 単位、後期の Junior English 2 (JP2) は選択講義科目で 1 コマ・2 単位である。4 回生の Senior English は専門科目の卒業研究の活動の一部である²⁰⁾。

表 1: 生命科学部・薬学部「プロジェクト発信型英語プログラム」の内訳

	必修/ 選択	演習科目/ 講義科目	前期	後期	通年
1 回生 Freshman English	必修	演習科目	Project 1 (P1) SkillWorkshop1 (S1)	Project 2 (P2) SkillWorkshop2 (S2)	4 コマ・4 単位
2 回生 Sophomore English	必修	演習科目	Project 3 (P3) SkillWorkshop3 (S3)	Project 4 (P4) SkillWorkshop4 (S4)	4 コマ・4 単位
3 回生 Junior English 1	必修	講義科目	Junior Project 1 (JP1)	/	1 コマ・2 単位
3 回生 Junior English 2	選択	講義科目			Junior Project 2 (JP2)
4 回生 Senior English	必修	卒業研究	卒業研究の一部	卒業研究の一部	2 コマ・4 単位

2.2 本プログラムの「プロジェクト」

「プロジェクト」は、1.5. で説明したコミュニケーション活動の「場」であり本英語プログラムの中心を成す。「プロジェクト」では各自が関心あるテーマを選びプロジェクトを行い、プロジェクトを通して自分の考えを探求しその成果を発信する。1、2 回生の「プロジェクト」P1、P2、P3、P4 では学生各自が日常生活、クラブ活動、授業における関心事をテーマにプロジェクトを行い、コミュニケーション能力の基盤造りをする。3 回生の Junior English の「プロジェクト」JP1 と JP2 で専門分野に関するテーマを選び、専門的でアカデミックなプロジェクトを行う。4 回生は卒業研究の一環として卒業論文のアブストラクト（概要）を英語で書き、その要旨を口頭で発表する。このように P1、P2、P3、P4、JP1、JP2 と続く過程で、プロジェクトの内容は日常生活から徐々に専門分野の関心事に深まり、両学部の理念である国際プロジェクトに参加し得るコミュニケーション能力の習得に到達できるものとする。また、1.4. で説明したようにプロジェクトに並行し、図 6 で示すリサーチ (research)、ディスカッション (discussion)、ディベート (debate)、シンポジウム (symposium) など、研究者や技術者に不可欠の英語運用能力としてプロフェッショナル・スキル (professional skills) を身につける。これらのスキルを駆使してプロジェクトの内容を深め発展させることができる。1 回生と 2 回生では basic professional skills と intermediate professional skills を学び、3 回生ではアカデミックな専門領域に必要なアドバン

ス・プロフェッショナル・スキル (advanced professional skills) を学び、4 回生で卒業論文の Abstract を英語で書き、卒業論文の要旨を英語でプレゼンテーション (presentation) できるようにする。

以下、本英語プログラムの P1 と P2 で使用するテキスト『Do Your Own Project in English Volume 1』(2008、鈴木佑治著、郁文堂) と、P3 と P4 で使用する『Do Your Own Project in English Volume 2』(2009、鈴木佑治、山中司、関口幸代、近藤悠介著、郁文堂) の目次を掲載する。これらのテキストの目次と「プロジェクト」の P1、P2、P3、P4 のシラバスは同一で、各学期、テキストに沿って毎回 1 ユニットずつカバーしながらプロジェクトを進めていく。

Project 1 (P1) 『Do Your Own Project in English Volume 1』の Part I に沿う。

PART I SELF-APPEAL, MINI-PROJECT & MINI-PRESENTATION

UNIT 1	ウォーミング・アップ 1	自己紹介と他己紹介
UNIT 2	ウォーミング・アップ 2	自己アピール
UNIT 3	リサーチ・スキルズ 1	リサーチとは
UNIT 4	リサーチ・スキルズ 2	リサーチの概要
UNIT 5	リサーチ・スキルズ 3	ミニ・プロジェクト(1) アイディアの整理とテーマ
UNIT 6	リサーチ・スキルズ 4	ミニ・プロジェクト(2) リサーチ方法の多様性
UNIT 7	プレゼンテーション 1	オーラル・プレゼンテーションのための原稿
UNIT 8	プレゼンテーション 2	[中間発表] ミニ・プレゼンテーション(1)
UNIT 9	プレゼンテーション 3	[中間発表] ミニ・プレゼンテーション(2)
UNIT 10	プレゼンテーション 4	質問をして答える(1) わりこみとくり返し
UNIT 11	プレゼンテーション 5	質問をして答える(2) 確認と説明
UNIT 12	成果のまとめ 1	Written Presentation
UNIT 13	成果のまとめ 2	[最終発表] ミニ・プレゼンテーション(1)
UNIT 14	成果のまとめ 3	[最終発表] ミニ・プレゼンテーション(2)
UNIT 15	成果のまとめ 4	[最終発表] ミニ・プレゼンテーション(3)

Project 2 (P2) 『Do Your Own Project in English Volume 1』の Part II に沿う。

PART II PROJECT (RESEARCH, DISCUSSION & PRESENTATION)

UNIT 16	リサーチ・スキルズ 5	プロジェクトの立ち上げ: リサーチとは?
UNIT 17	リサーチ・スキルズ 6-1	リサーチの準備(1) インタビューによるデータ収集
UNIT 18	リサーチ・スキルズ 6-2	リサーチの準備(2) アンケート (questionnaire) によるデータ収集
UNIT 19	リサーチ・スキルズ 7-1	リサーチの準備 (3-1) ビデオクリップ等のマルチ・メディア資料のサマライゼーション等 [1]
UNIT 20	リサーチ・スキルズ 7-2	リサーチの準備 (3-2) ビデオクリップ等のマルチ・メディア

		ア素材のサマライゼーション等 [2]
UNIT 21	プレゼンテーション 6	[中間発表] ミニ・プレゼンテーション(1)
UNIT 22	プレゼンテーション 7	[中間発表] ミニ・プレゼンテーション(2)
UNIT 23	リサーチ・スキルズ 8-1	リサーチの準備 (4-1) パラグラフ・リーディング [1]
UNIT 24	リサーチ・スキルズ 8-2	リサーチの準備 (4-2) パラグラフ・リーディング [2]
UNIT 25	リサーチ・スキルズ 9-1	リサーチの準備 (5-1) サマリーを書く [1]
UNIT 26	リサーチ・スキルズ 9-2	リサーチの準備 (5-2) サマリーを書く [2]
UNIT 27	リサーチ・スキルズ 10	アウトラインを書く
UNIT 28	成果のまとめ 1	[最終発表] プレゼンテーション(1)
UNIT 29	成果のまとめ 2	[最終発表] プレゼンテーション(2)
UNIT 30	成果のまとめ 3	[最終発表] プレゼンテーション(3)

Project 3 (P3) 『Do Your Own Project in English Volume 2』の Part III に沿う。

PART III: GROUP PROJECT, DISCUSSION, PANEL DISCUSSION & DEBATE

UNIT 31	プレゼンテーション 8	グループ・プレゼンテーション(1): グループで共通テーマを考える
UNIT 32	プレゼンテーション 9	グループ・プレゼンテーション(2): ディスカッション
UNIT 33	プレゼンテーション 10	グループ・プレゼンテーションの表現を学ぶ
UNIT 34	プレゼンテーション 11	ディベートとパネル・ディスカッションの方法
UNIT 35	ディベート 1	ディベートの表現とシミュレーション
UNIT 36	ディベート 2	表現とミニ・ディベート(1)
UNIT 37	ディベート 3	表現とミニ・ディベート(2)
UNIT 38	パネル・ディスカッション 1	パネル・ディスカッションの表現とシミュレーション
UNIT 39	パネル・ディスカッション 2	表現とミニ・パネル・ディスカッション(1)
UNIT 40	パネル・ディスカッション 3	表現とミニ・パネル・ディスカッション(2)
UNIT 41	プレゼンテーション 12	最終発表の準備(1)
UNIT 42	プレゼンテーション 13	最終発表の準備(2)
UNIT 43	プレゼンテーション 14	最終発表の準備(3)
UNIT 44	成果のまとめ 1	[最終発表] グループ・プレゼンテーション(1)
UNIT 45	成果のまとめ 2	[最終発表] グループ・プレゼンテーション(2)

Project 4 (P4) 『Do Your Own Project in English Volume 2』の Part IV に沿う。

PART IV: ACADEMIC WRITING & DISCUSSION

UNIT 46	Introduction to Advanced Project (Academic Writing and Presentation)	
UNIT 47	Introduction to Academic Writing	アカデミック・ライティングとは
UNIT 48	Prewriting 1	Free writing を通してアイデアを練る

UNIT 49	Prewriting 2	情報を集める
UNIT 50	Drafting 1	本論のパラグラフ・ライティング(1)
UNIT 51	Drafting 2	本論のパラグラフ・ライティング(2)
UNIT 52	Drafting 3	本論のパラグラフ・ライティング(3)
UNIT 53	Drafting 4	序論の書き方
UNIT 54	Drafting 5	結論の書き方
UNIT 55	Drafting 6	校正と参考文献の作成
UNIT 56	Drafting 7	アブストラクトを書く
UNIT 57	Preparation for Academic Presentation	最終発表の準備
UNIT 58	成果のまとめ 1	[最終発表] アカデミック・プレゼンテーション(1)
UNIT 59	成果のまとめ 2	[最終発表] アカデミック・プレゼンテーション(2)
UNIT 60	成果のまとめ 3	[最終発表] アカデミック・プレゼンテーション(3) Term paper 提出

P1 では趣味・日常の関心事をもとに各自プロジェクトを行い self-appeal として発信する。リサーチ、ディスカッション、プレゼンテーションの基本を学習し、英語でコミュニケーションすることに慣れる。P2 では引き続き趣味・関心事をテーマに、本格的なりサーチ、ディスカッション、プレゼンテーションの方法を学び、コンテンツを深め本格的なプロジェクトを組みその成果を発信する。P1 と P2 の状況設定が親密、カジュアル、インフォーマルに留まるのに対し、P3 と P4 の状況設定はフォーマルかつアカデミックなものに移行する。P3 では P1 から P2 のプロジェクトの成果を踏まえて、グループを組み共通テーマを探してプロジェクトを行い、ディベートとシンポジウムのいずれかの形式を選択して成果発表をする。P1、P2、P3 ではプレゼンテーションを行いその結果をレポートにまとめたが、P4 ではアカデミック・ライティングのスキルを学びながら、1,500~2,000 words の term paper を書き、出来上がった term paper についてプレゼンテーションをする。

リサーチは主として課外活動として行われるので各週の宿題・課題はすこぶる重要である。指定された Web サイト (Web CT) にリサーチの成果を英語で提出し、その成果をクラスで発表しディスカッションして次週に向けてプロジェクトを進める。本稿執筆中の 2009 年 8 月の時点で両学部の 1 期生は 2 回生になり P1、P2、P3 を無事終了し、各自独創的なテーマを立て意欲的に取り組み成果を残した。2008 年 4 月の授業開始直後には英語で自己紹介さえできずに戸惑っていた彼らも、数週後の同年 6 月頃には英語で意見交換して発表するまでに成長した。1.2. で述べたようにメッセージを発信・受信し、1.3. で指摘したような多感覚で多様なメッセージを独自の表現様態を駆使して発表をすることも難なくこなしてきた。初めは単語の羅列の域を出ないカジュアル・スタイルのたどたどしい英語を使い、多様な伝達メディアで補完しながらメッセージを発信していたが、P1 の後半から P2、P3 に進むにつて、後述する S1、S2、S3 での学習効果から英語のフォーマリティーも徐々に高まり、カジュアルからインフォーマルそしてややフォーマルな言説に近づいてきた。ただし、いかなる言語であれ発信能力は受信能力より質的に落ちるという現実を踏まえて、この段階では英語の修正はコミュニケーションの流れを止めないように注

意しながら行っている²¹⁾。

かくして1回生 22 クラス (約 400 名弱) と 2 回生 26 クラス (約 480 名) の全員が漏れなくシラバス通りにプロジェクトを組み、英語で情報交換しながら活発にコミュニケーション活動に勤しんでいる。「プロジェクト」の授業が 1.4. で述べた機能的英語能力を習得する場になっていることは疑う余地が無く、個人情報・知的所有権保護のためにここでは披露できないが驚くほど創造力に富んだ発表が多い。1.2. から 1.6. で述べた意味でグローバル・コミュニケーションへの参入の場として、「プロジェクト」がそうした能力を育成するに十分効果があるものと確信している。現在のところ、「プロジェクト」では英語の能力別クラス分けは行っていない。上述したとおり、コミュニケーションは言語だけで完結するものではないこと、また、プロジェクトは様々な能力を持つ人が集まり協働することにより成立することなどを鑑みて決断した。英語能力が足りなくてもプロジェクトをする上で必要とする他の能力を有する場合が多い。1.6. で述べたようにグローバル・コミュニケーションは様々な社会的バックグラウンドを持つ人々が協働する場であり、グローバル・プロジェクトはまさしくその縮図である。詳細については、www.pep.sk.ritsumei.ac.jp を参照されたい。

2.3. 本プログラムの「スキル・ワークショップ」

「プロジェクト」に平行し「プロジェクト」のサポートシステムとして、プロジェクトをする上で必要な英語運用スキル (図 5) と、英語能力 (図 4) を総合的に学習する「スキル・ワークショップ」を設けた。1.4. で指摘したような諸点に留意して、機械的訓練ではなく、インタラクティブ (interactive) な活動を中心に据えて機能的に学習できるよう工夫にした。1 回生のスキル・ワークショップは sound-focused courses と銘打ち、音 (sounds) による受信・発信活動に焦点を当て、S1 で listening、そして S2 で speaking を集中的に学習する。2 回生のスキル・ワークショップは letter-focused courses と銘打ち、文字 (letters) による受信・発信活動に焦点を当て、S3 で reading、そして S4 で writing を集中的に学習する。既に述べたように、コミュニケーションはあらゆる活動の総合体であり、言語と非言語を分けること、ましてや、通常の言語活動である listening, speaking, reading, writing を分けることは無意味である。従って、sound-focused courses の S1 では listening を、S2 では speaking を中心に据えるものの、S1 では speaking も、S2 では listening も取り入れ、かつ reading と writing の letter-focused 活動も行う。また、文法と語彙・表現も機能的に学ぶことができるよう interactive な活動に組み入れている。このように「スキル・ワークショップ」は「プロジェクト」のサポート・システムとして、「プロジェクト」に必要な英語運用能力の習得に特化する。同時並行で進む「プロジェクト」では、リサーチ、ディスカッション、プレゼンテーション、ディベート、シンポジウムなど、プロジェクト活動に不可欠なプロフェッショナル・スキルを通して、「スキル・ワークショップ」で学習中の英語運用能力を活用できる。このように本プログラムの 2 つのモジュールの目的を明確にして機能させることにより、相乗効果が生まれ学生のモチベーションを高め保持できるものと思う。

「スキル・ワークショップ」の目的は英語運用能力の向上であり、能力別にレベルを分けクラスを編成する方がより効果的であると考えた。受講者全員 TOEIC Bridge (1 回生の春学期開始時のみ) または TOEIC-IP を受けさせて能力別クラス編成をしている。2008 年度の 1 回生は既

述したとおり、2008年12月に受けたTOEIC-IPで同年6月に受けたスコアに比べ平均して40点アップすることができた。本プログラムがTOEICトレーニングに特化したものではなく、にもかかわらずスコアがアップしたことは意義深い。個別ケースを精査すると100点～200点もスコアをアップさせ650点～800点以上に伸ばした学生もいるが、他方ではスコアを落とした学生もおり一概には言えないが全般的に上昇していることは事実である²²⁾。

「スキル・ワークショップ」は外部教育機関2社に業務委託をしているが、我々の理念と概要を提示して、シラバス、教材、テスト、教授法、カリキュラムを共同で開発している。これら2社それぞれとはほぼ毎週会議をもち教学や運営面の問題点を精査し改善に努めている。2009年8月現在1回生26クラスがS1を終了し、2回生26クラスがS1、S2、S3を終了した。受講生のアンケート調査（回答率95%以上）の評価は良く、かなりインターラクティブな授業が展開されている。詳細については、<http://www.pep.sk.ritsumei.ac.jp>を参照されたい。

2.4. 先端的なデジタル・メディアのフル活用

グローバル規模のプロジェクトは先端デジタル・メディアの活用を前提とする。図1が示すようにプロジェクトとスキル・ワークショップの活動をオンライン上で展開できるように、既存のインフラを整備し、デジタル情報を送受信しかつ保管できるようにした。リサーチの大部分はグループ活動として授業外に行われ、メンバー同士が自由に意見交換をすることができるようにした。また、ビデオ・カンファランスによる遠隔会議やスカイプなどの無料ソフトを活用して、海外の大学とオンライン交流を行っており、スキル・ワークショップにおいても、オンライン自動学習システムを使い、英語運用スキルの学習が授業外においてもできるよう整備した。2008年度と2009年度は立命館大学が導入したBlackboard社のWeb CTを利用している。プロジェクトでは全課題をWeb CT上のサイトに提出させ、授業外で学生および教員が自由に意見交換できるよう編成した。同サイトには本プログラムの紹介、授業シラバス、辞書、学習に手助けになる情報を載せている。詳細については、<http://www.pep.sk.ritsumei.ac.jp>を参照されたい。

2.5. 本プログラムの学習成果と評価

本プログラムの学習成果として大きく分けると、(1)プロジェクトの成果発表（口頭とレポート、ペーパーなど）、(2) professional skills の習得、(3) 英語運用能力（English skills）と英語能力（English competence）の習得の3点がある。(1)と(2)は「プロジェクト」に関連し、(3)は「スキル・ワークショップ」に関連する。「プロジェクト」の評価はシラバスに明記した評価基準に従い、リサーチの内容、構成、言語、レトリカルな説得力、ICT等の効果的なマルチ・メディアの使い方、プレゼンテーションの準備等の項目を中心に評価する²³⁾。「スキル・ワークショップ」は、発信活動と受信活動の両者を評価する。発信活動についてはインタビュー（interview）や作文（composition）等を通して、内容、構成、言語、説得力等の基準をもとに評価し、後者についてはTOEICを参考に、主として当該の外部教育機関が開発する諸テストを利用し、読解力、聴解力、文法・語彙・表現などの能力を評価する²⁴⁾。

2.6. 本英語プログラムの共同運営体制

本英語プログラムを生命科学部・薬学部のカリキュラムに定着させるために、英語専任教員と専門分野の教員が密に意見を交換している。また、事務局との連携は欠かせない。時間割編成一つをとっても事務局のノウハウと協力が無ければ、全学生がつつがなく授業を履修できるようにすることができない。また、本英語プログラムはオンライン活動に依存することから、大学のネットワーク管轄の部署の協力無しには不可能である。両者が意見を交換して協力しあうことにより、事務局が本英語プログラムの内容を理解し、英語専任教員が英語プログラム運営に関わる事務処理を理解できる。こうしてよりよい英語プログラムを提供するための運営基盤を整えることができる。

生命科学部・薬学部は、1. 英語プログラム運営委員会、2. 英語プログラム部会の2つの組織を設け英語プログラムの運営を行っている。英語プログラム部会は英語担当教員で構成され、教材、教授法開発、英語プログラム全体の教学およびアドミニストレーション上の諸問題を議論する。英語プログラム運営委員会は、両学部学部長、学科長および英語専任教員、担当職員で構成され、生命科学・薬学の両学部が英語プログラムに全責任を持つ。英語プログラム部会は毎週開催され、「プロジェクト」および「スキル・ワークショップ」の進捗状況を精査し、学部承認が必要な重要案件を議論しその結果を学部運営委員会に上げて承認を受ける。また、月に1度、英語プログラム担当運営委員および事務担当者を交えて拡大英語プログラム部会を開き、「プロジェクト」および「スキル・ワークショップ」の進捗状況を報告し諸案件を議論する。「スキル・ワークショップ」を担当する外部教育機関と英語担当教員は毎週打ち合わせ会を持つが、加えて、毎月1度の報告会を催し意見交換をしている。英語プログラム運営委員会は毎学期2回開催され、当該学期の英語プログラムの成果報告をして意見交換をする。「スキル・ワークショップ」担当の外部教育機関は、当該学期の授業成果報告と次学期の計画を提示し各委員から質疑を受ける。1回生から2回生で習得する英語運用能力を3回生からはじまる専門分野に必要な英語運用能力に成長させるには、専門教育教員と英語担当教員が協力体制を組む必要がある。学生が卒業時までには先端的グローバル・プロジェクトに参加する英語運用能力を身につけることができるよう、こうした体制を整備し年毎に強化することが望まれる。運営体制の詳細については、<http://www.pep.sk.ritsumei.ac.jp> を参照されたい。

3. 最後に

生命科学部・薬学部の「プロジェクト発信型英語プログラム」は始まったばかりである。本プログラム自体が一大プロジェクトであり、英語専任教員1名と嘱託講師5名、学部、事務局、外部教育機関が密に協働しながら立ち上げている。現在本プログラムを受講している学生諸君が10年後それぞれの活躍の場で役に立つプログラムであったかどうかを判断する、それこそが真の授業評価でと考える。彼らが卒業後も何らかの形でコンタクトを続け忌憚の無い意見を投げかけてくれるであろうことを期待し、それを聞き改善し進化し続けるプログラムであることを願う。

注

- 1) ヤコブソンはヨーロッパ構造主義の先駆者の1人で R. ストロースに影響を与えた。彼の音韻論は N. チョムスキーにも影響を与えたが、コミュニケーションを無視して言語能力 (competence) の形式分析に終始するチョムスキーらの言語分析を批判した。詩論の見地からコミュニケーションに使用される言語の諸機能を分析した。
- 2) コミュニケーション論の詳細については、拙著『英語教育グランドデザイン』慶應義塾大学出版会、2000年と『言語コミュニケーションの諸相』創英者・三省堂、2003年等を参照されたい。
- 3) 詳細については、Marieb (1997) を参照されたい。
- 4) 詳細については、Suzuki (2006) を参照されたい。
- 5) “percepts” は「表象」とも訳される。
- 6) 詳細については、Benson (1994) を参照されたい。
- 7) 日本の教育が創造力を育成できないと言われるが、その要因の一つとも考えられる。
- 8) 詳細については、Suzuki (2002)、Suzuki (2006)、Suzuki (2009) を参照されたい。
- 9) 脳の臨界期以降は自然習得ではなく意図的学習に変わると言われる。母語だけではなく外国語にも当てはまり、臨界期を過ぎれば過ぎるほど学習が困難になると言われているが、個人差があり一概には言えない。
- 10) 日本語のプロジェクトは「企画」、「計画」、「企画・執行」などを意味する名詞として日本語に定着した。*The World Book Dictionary* を参照すると、英語の project も plan (計画)、scheme (計画)、enterprise (企画)、undertaking (企画)、a special assignment planned and carried out by a student or a group of students or the entire class (特別な宿題)などを意味し、日本語のプロジェクトとほぼ同じ意味を共有する。
- 11) *The World Book Dictionary* を参照した。推察するに、名詞形は *proiectum* であり、*proicere* の過去分詞形が *proiectus* であったので、名詞形も動詞形も project に落ちついたものとも考えられる。
- 12) 思考の神経学の percept (表象) という概念も示唆している。
- 13) *The World Book Dictionary* を参照した。inject は動詞で、名詞形は injection である。
- 14) 脳科学者 Damasio (1994) の ‘disposition’ という概念や Dennett (1991) の ‘memes’ という概念は、ここで述べた関心と関連するものと考えられる。詳細については、Suzuki (2008) を参照されたい。
- 15) 明治時代の言文一致運動や中国の文学革命における百話運動などの民主的な運動もあるが、基本的にはエリートの話す変種が名声 (prestige) を持ち、それが社会言語学というリード (lead) となり標準語を形成することが多い。
- 16) その発音は Received Pronunciation (RP) と呼ぶ。宮廷英語は Queen’s (or King’s) English と呼ばれる。
- 17) チョムスキーは “the ideal speaker-hearer” の言語という仮想の変種を想定している。社会言語学や語用論の視点で見ると大いに疑問が残る。
- 18) Ferguson (Charles A., “National Sociolinguistic Profile Formulas.” In *Sociolinguistics*. W. Bright, (ed), 1972, pp.309-324.) および Fishman (Joshua A., *The Sociology of Language*, 1972, Massachusetts, Newbury House.) による古典的なタイポロジー (linguistic typology) の研究にはグローバル英語という視点はなかった。「プロジェクト発信型英語プログラム」はそうした社会言語学の研究にも道を拓く。
- 19) セクション 1.6. で述べたスタイルの問題もある。
- 20) Junior English 1 to 2 (JP1, JP2) は本稿では取り上げないが、骨子は決まり来年の開講に向けて準備中である。
- 21) 本稿執筆中は Project 4 (P4) の Academic Writing & Discussion は進行中であるため本稿では触れることができなかったが、本稿校正中の 2010 年 1 月の時点で、学生のライティング能力は驚く程進歩し、シラバスどおりに各自 2000 語程度の内容の濃いオリジナル term paper を書き 8 分の口頭発表をしたことを付記する。

- 22) 2010 年 12 月に行われた TOEIC-IP の平均点は、2008 年 6 月に比べて、生命科学部では約 52 点、薬学部では約 60 点の上昇が見られた。
- 23) 全学生のプロジェクト成果は Web CT と DV テープなどで記録として保管されている。ただし、個人情報保護のために一般には公開しない。
- 24) これらのテストについては、英語専任教員の意見も取り入れて改善している。

参考文献

- Austin, J. L., *How to Do Things with Words?* Cambridge, Mass., Harvard University Press, 1962.
- Benson, D. F., *The Neurology of Thinking*. New York, Oxford, Oxford University Press, 1994.
- Chomsky, Noam, "On the Nature, Use and Acquisition of Language." In William G. Lycan. (ed.), *Mind and Cognition*. Cambridge, Mass., Basil Blackwell, 1990, pp. 627-646.
- Damasio, Antonio, *Descartes' Error: Emotion, Reason, and the Human Brain*. New York, Penguin Books, 1994.
- Dennett, Daniel C., *Consciousness Explained*. New York, Little Brown and Company, 1991.
- Dirven, René, N. Yuji Suzuki et al. *User's Grammar of English*. Frankfurt, New York, Peter Lang, 1989.
- Fasold, Ralph, *The Sociolinguistics of Society, Introduction to Sociolinguistics Volume I*, Cambridge, Mass., Basil Blackwell, 1987.
- Fasold, Ralph, *The Sociolinguistics of Language, Introduction to Sociolinguistics Volume II*, Cambridge, Mass., Basil Blackwell, 1990.
- Haugeland, John, 1990. "The Prospects for Artificial Intelligence." In William G. Lycan. (ed.), *Mind and Cognition*. Cambridge, Mass., Basil Blackwell, 1990, pp.660-670.
- Jakobson, Roman, *On Language*. Linda W. Waugh and Monique Monville-Burton (eds.), Cambridge, Mass., Harvard U. Press, 1976.
- Joos, Martin. *English Verb*. Wisconsin, University of Wisconsin Press, 1964.
- Kakiotek, P., John Anderson, Bernard Comrie, N. Yuji Suzuki, et al., *Problems in The Modality of Natural Language*. The Pedagogical University of Opole Monograph Series. No. 153, 1991.
- Lakoff, George, *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago, The University of Chicago Press, 1987.
- Marieb, Elaine N., *Essentials of Human Anatomy and Physiology*. (5th ed.), Menlo Park, The Benjamin/Cummings Publishing Company, Inc, 1997.
- McLuhan, Marshall, *The Gutenberg Galaxy; The Making of Typographical Man*. Toronto, University of Toronto Press, 1962.
- McLuhan, Marshall, *Understanding Media: The Extension of Man*. New York, McGraw-Hill, 1964.
- Minsky, Mervin, *The Society of Mind*. London, Picador, 1975.
- Piaget, J., *Language and Thought of the Child*. (Translated by M. Gabain). London, Routledge & Kegan Paul, 1926.
- Polanyi, Michael, *The Tacit Dimension*. London, Routledge & Kegan Paul Ltd, 1966.
- Putnam, Hillary, *Pragmatism*. Oxford, Cambridge, Mass., Basil Blackwell, 1995.
- Quine, W.V., *Pursuit of Truth*. Cambridge, Mass., Harvard University Press, 1990
- Sapir, Edward, *Language*. New York, Harcourt, Brace, 1921.
- Saussure, Ferdinand de, *Cours de Linguistique Générale*. 4th. ed. Paris, Payot, 1949.
- Saussure, Ferdinand de, *Troisieme Cours de Linguistique Générale (1910-1911)*. E. Komatsu(ed.) *Saussure's Third Course of Lectures on General Linguistics 1910-1911*. Translated by E. Komatsu and Roy Harris. Oxford, Cambridge, Pergoman Press, 1993.

立命館大学生命科学部・薬学部「プロジェクト発信型英語プログラム－Project-based English Program」の理論的基盤と実践

- Savage-Rumbaugh, Sue & R. Lein, *The Ape at the Brink of the Human Mind*. New York, Brockman, Inc., 1994.
- Skinner, B. F. *Verbal Behavior*. New York, Appleton-Century-Crofts, 1957.
- Suzuki, N. Yuji, *The Semantics of the English Modals: A Case of Multi-sensory, Multi-lateral Generation of Meaning in Communication*. Tokyo, Liber Press, 2002.
- Suzuki, N. Yuji, *Exploring D.F. Benson's Neurology of Thinking—A Search for the Neurological Foundation of Communication and Language*. Tokyo, Keio University Press, 2006.
- Suzuki, N. Yuji. *Exploring Antonio Damasio's Descartes' Error: Emotion, Reason, and the Human Mind—How Do Emotion, Reason, and Semantic Modality Cooperate in Reasoning or Deciding?* (2008年度立命館大学個人研究費成果報告書), 2009.
- 鈴木佑治『言語とコミュニケーションの諸相』創英社・三省堂、2000年
- 鈴木佑治『英語教育グランドデザイン：慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスの挑戦と展望』慶應義塾大学出版会、2003年
- 鈴木佑治『カタカナ英語でカジュアル・バイリンガル』NHK生活人新書、NHK出版、2003年。
- 鈴木佑治『グローバル時代の英語・英語教育：政策理念・開発・実践』公共政策研究所、2003年
- 鈴木佑治『小学生英語』小学館、2007年
- 鈴木佑治『英語が大好きになっちゃう本—Global English』小学館、2008年
- 鈴木佑治『Do Your Own Project in English Volume 1: プロジェクト発信型英語 Vol.1』郁文堂、2008年
- 鈴木佑治『For Lifelong English』『TOEFL メールマガジン』国際教育交換協議会、2007年～
- 鈴木佑治、関口幸代、近藤悠介、山中司。『Do Your Own Project in English Volume 2: プロジェクト発信型英語 Vol.2』郁文堂、2009年
- 鈴木佑治、田中茂範、吉田研作、霜崎實『コミュニケーションとしての英語教育』アルク、1994年
- 鈴木佑治「Project-based English プロジェクト発信型英語プログラム：外国語学習の手引き<生命科学部・薬学部> 2008年度入学生用」立命館大学生命科学部・薬学部、2008年
- 丸山圭三郎『ソシュールを読む』岩波新書、1983年
- 立命館大学生命科学部・薬学部英語プログラム部会「プロジェクト発信型英語プログラム」 (<http://www.pep.sk.ritsumeikan.ac.jp>)

The Project-based English Program for College of Life Sciences and College of Pharmaceutical Sciences at Ritsumeikan University — Its Theoretical Aspects and Practice

SUZUKI Yuji (Professor, College of Life Science)

Key words

Communication, production, perception, messages, media, global Englishes, projects, skill-workshops, collaboration

